

研究 2

## 通級指導教室と在籍学級の効果的な連携について

～読み書きに困難を抱える児童生徒の早期把握による支援体制の検討～

研修員 近藤 靖子

## 目 次

I	はじめに	25
II	問題の所在	25
III	研究の概要	26
IV	研究課題1 通級指導教室と在籍学級の連携の実態調査	27
	1 方法	
	2 結果	
	3 研究課題1の考察	
V	研究課題2 通級指導教室を活用した支援体制モデルの検討	30
	1 支援体制モデルの検討	
	2 支援体制モデルの実践	
	3 研究課題2の考察	
VI	成果と課題	39
VII	おわりに	40
VIII	引用・参考文献	40
IX	資料	42

## I はじめに

特別支援教育は、障がいのある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである（文部科学省，2007）。

各学校において行う特別支援教育の対象は、特別支援学級はもとより、通常の学級を含めて知的遅れのない発達障がいを含む特別な支援を必要とする児童等が在籍する全ての学校で実施されるものである。また、必ずしも、医師による障がいの診断がないと特別支援教育を行わないというものではなく、児童等の教育的ニーズを踏まえ、校内委員会等により「障がいによる困難さがある」と判断された児童等に対しては、適切な指導や必要な支援を行う必要がある（文部科学省，2017）。このことは障害者権利条約にも掲げられており、批准国である日本では、全ての教員が特別支援教育の目的や意義について十分に理解していることが不可欠である（文部科学省，2017）。

特に、「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査（以下、発達障害調査）」によって示された、小・中学校の通常の学級において、6.5%の割合で、学習面又は行動面において困難のある児童等が在籍し、その中には発達障がいのある児童等が含まれている可能性があるという推計結果からも、すべての教員に特別支援教育に関する一定の知識や技能を有することが求められていることは明らかである（文部科学省，2012a）。

これらのことから、各学校においては、在籍する児童生徒の実態把握に努め、特別な支援を必要とする児童生徒の教育的ニーズの把握と適切な指導及び必要な支援に努めなければならない。特に発達障がい等の障がいは、早期発見・早期支援が重要であることに留意し、実態把握や指導支援を着実にを行う必要がある。

本研究では、発達障がいの可能性のある児童生徒の抱える困難さに対して、すべての教員が正しい理解と認識を深め、効果的な支援へつなげるために、早期発見から早期支援につなげる組織的な体制の在り方についてモデル検討を行う。

## II 問題の所在

先述のとおり発達障害調査において、発達障がいの可能性のある教育的支援を必要とする児童生徒が通常の学級に6.5%の割合で在籍することが明らかになった。

発達障がいのある児童生徒に対して適切な支援がなされない場合、その特性によって生じる問題に周囲が気付かずに無理強い、叱責などを繰り返すことで失敗やつまずきの経験が積み重なり、自尊感情の低下を招き、更なる適応困難、不登校や引きこもり、反社会的行動等、二次的な問題としての問題行動（以下、二次障がい）が生じることがあるとされている（文部科学省，2010）。こうした二次障がいを未然に防止するために、発達障害者支援法において、国及び地方公共団体は、早期発見に留意し、発達障がい児に対し、早期にその者の状況に応じて適切に、就学前及び学校における発達支援等を講ずるものと明記されている。

しかし、前述の発達障害調査によると、通常の学級に在籍し、学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた6.5%の児童生徒のうち、校内委員会において支援の必要性が判断

された児童生徒は、18.4%という結果が示されていることから、発達障がいの可能性のある児童生徒が適切な支援を受けられていない可能性が考えられる。

このことから、本研究では、必要に応じて、通常の学級に在籍する発達障がいのある児童生徒に対して専門的な場で個別の指導を行っている通級指導教室の担当者（以下、通級担当者）の助言やこの機能を活用した支援体制の構築について検討を行うこととした。

通級による指導とは、学校教育法施行規則に基づき、小・中学校において、各教科等の指導は通常の学級で受けつつ、障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服するための指導を例えば「通級指導教室」といった特別の指導の場で受ける教育の形態である。通級指導教室の場を活用することは、発達障がいのある児童生徒にとって効果的であるということが他の研究論文からも明らかになっている。この通級担当者のこれまでの経験や専門性、その機能を活用して支援体制を構築することが、通常の学級に在籍する発達障がいのある児童生徒の支援につながると考えた。

また、早期発見の方法については「発達障害者支援に関する行政評価・監視結果に基づく勧告」（総務省、2017）において、「発達障害の発見の遅れは、適切な支援につながらず、その結果として、不登校や暴力行為などの二次障害にも発展するおそれがある」と示され、学校在籍時における効果的な発達障がいの発見方法の普及については、発達段階に応じた行動観察にあたっての着眼点等に併せて、共通化した標準的なチェックリストの活用方法を提示することが示されている。

このことから、早期発見のツールとして、津市と三重県（県立かがやき特別支援学校）が連携して作成したチェックリスト（発達障害の可能性のある児童生徒等に対する教科指導法研究事業2018年より）を活用することにした。

以上の事より、通常の学級に在籍する発達障がいの可能性がある児童生徒をチェックリストで実態を把握し、配慮が必要であると思われる児童生徒及び通級児生に対し効果的な支援ができるように、通級指導教室の専門性を活用した指導体制の構築について考察する。

### III 研究の概要

本研究の目的は、発達障がいの可能性のある児童生徒の抱える困難さに対してすべての教員が正しい理解と認識を深め、効果的な支援へつなげるために、早期発見から早期支援につなげる組織的な体制の在り方についてのモデル検討を行うことである。

発達障害者支援法においては、「発達障害は、自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害、その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるもの」と定義されているが、本研究においては、特に、通常の学級に在籍する読み書きに困難さを抱える児童生徒に焦点を当てて研究を行うことにした。

その理由は以下のとおりである。

学校では文字を読むこと、書くことをベースにした学習が多い。そのため、読み書きに困難さを抱える児童生徒は、板書の写しや、漢字の書きとり、音読などに困難さを示す状態にあると言われている。その困難さに教員や保護者等が気づいていない場合には、本人が怠けている、集中ができないと叱責を受ける場合もある。平谷ら（2018）は、学習障害

の中でも、読み書きに困難を抱える児童生徒は、知識や理解力はあるものの、学校における学習では読み書きを問われることが多く成績低下を招き、自尊感情を低下させていると述べている。さらに、石谷ら（2019）は読み書きの困難を抱える児童生徒のニーズを早期に把握し、合理的配慮の取り組みが望まれると述べている。

このような読み書きに困難を抱える児童生徒が、その特性に配慮して指導が受けられる場として、通級指導教室が設置されている。通級指導教室は、津市内では修成小学校、育生小学校、村主小学校、一志西小学校、豊里中学校の5校に、自校通級<sup>1</sup>及び他校通級<sup>2</sup>の形態で設置されている。

本研究では、現在、通級指導教室と連携関係にあり、通級による指導を受けている児童生徒（以下、通級児生）が在籍する通常の学級（以下、在籍学級）での調査に基づいて、読み書きの困難を抱える児童生徒の実態を把握し、効果的な支援へつなげるための検討を行うこととした。

支援体制のモデル検討にあたっては、連携の実態を把握し、現状の課題を明らかにすることが必要ではないかと考えた。したがって、研究課題1として、通級指導教室と在籍学級の連携の実態調査を行い、研究課題2として、研究課題1での連携の実態を踏まえ、支援体制のモデル検討を行う。

#### IV 研究課題1 通級指導教室と在籍学級の連携の実態調査

##### 1 方法

通級指導教室と在籍学級の連携についての実態を調査するため、(1) 通級指導教室担当者（以下、通級担当者）と、(2) 津市内のA通級指導教室に他校通級する児童生徒の在籍学級担任に対して、1対1のインタビューを行った。

通級担当者と在籍学級の担任にインタビューを個々に行うことで、通級に対する双方の思いが分かり、現状の課題が把握できると考えた。特に、連携の現状を明らかにし双方の指導に対する考え方を比較検討することで、研究課題2で行う、支援体制のモデル検討に効果があると考えた。

質問内容については、連携について研究を行った国立特別支援総合研究所の質問項目（2018）を参考に本研究に該当すると思われる質問を行うことにした。

##### (1) 通級担当者へのインタビュー

期間：7月中旬から8月末

対象：市内すべての通級担当者（n=9）

質問内容：通級による指導で大切にしていること

連携について思うこと

在籍学級への要望等

<sup>1</sup> 自校通級とは、通級指導教室が設置されている学校に在籍する児童生徒が自校の通級指導教室で指導を受ける形態。

<sup>2</sup> 他校通級とは、通級指導教室が設置されている学校に他校の児童生徒が通学し、他校で指導を受ける形態。

- (2) A通級指導教室に他校通級している児童生徒の在籍学級担任へのインタビュー  
期間：8月  
対象：A通級指導教室に他校通級している児童生徒の在籍学級担任（n=6）  
質問内容：A通級指導教室について思うこと  
A通級指導教室との連携について思うこと  
A通級指導教室への要望等

## 2 結果

- (1) 通級担当者インタビュー  
通級担当者へのインタビューの結果を次の1から3に示す。

### 1 通級による指導で大切にしていること

---

- ・ 学習や生活での困り感の要因を探るために、個々に合った様々な発達検査を実施している。児童生徒の観察、保護者からの聞き取りを行い、アセスメントに基づいた指導を行っている。
  - ・ 多種多様なニーズに対応していくために、他の市町の通級担当者と連絡を取り合っている。
  - ・ 通級指導教室での指導に反映させているために、特定の曜日に他校訪問を実施している。
  - ・ 進路などの学校間での引継ぎのために、電話ではなく、必ず担当者と面談の上で実施している。
  - ・ 児童生徒の自尊感情を高めるために、通級指導教室では「できた」「わかった」「がんばった」と児童生徒が思える指導内容にしている。
  - ・ 教室から退室するときに「また、行きたい」と思えるようにするために、指導時間内に「自分ではできるかも」「もっとやってみたい」と感じる内容に努めている。
  - ・ 保護者の協力や理解を得るために、事前に通級指導教室の指導目的と支援や指導の協力をお願いしている。
  - ・ 保護者と信頼関係を良好にするために、連絡を密に取り合っている。
- 

### 2 連携について思うこと

---

- ・ 自校通級に比べ、他校通級では児童生徒に関わる時間が少なく、在籍学級担任との情報共有が難しいため指導効果につなげにくい。
  - ・ 他校への訪問時間や連携会議の時間を確保したいが難しい状況である。
  - ・ 通級指導教室の参観を在籍学級担任に依頼するも、実現が難しい状況である。
  - ・ 通級の目的や、指導内容にもっと興味を持ってほしい。
- 

### 3 在籍学級への要望等

---

- ・ 通う子どもたちの多様化によりアセスメントに時間を要するために、事前にアセスメントを実施できる仕組みにしてほしい。
-

- (2) A通級指導教室に他校通級している児童生徒の在籍学級担任へのインタビュー  
A通級指導教室に他校通級している児童生徒の在籍学級担任へのインタビューの結果を次の4から6に示す。

#### 4 A通級指導教室について思うこと

---

- ・ 学校では困っていないが、家庭内で気持ちのコントロールが難しく、暴言暴力があるので、気持ちの表し方やコミュニケーションの方法を学びに行っていると保護者から聞いている。
  - ・ 学習の定着が難しいから行っているのだと思う。
  - ・ 授業中や学校では、なかなか「書く」学習に参加できない。保護者から「通級指導教室では集中して学習している」と聞いている。
  - ・ 学習の定着が難しいので、丁寧に学習を見てもらうために通っていると思う。
  - ・ 特に指導内容を意識したことはない。
  - ・ 通級指導教室は「ことばの教室」だと思っていた。
- 

#### 5 A通級指導教室との連携について思うこと

---

- ・ 研修先で会ったときに、通級担当者から楽しく指導を受けていることや、頑張っていることを聞いている。
  - ・ 通級に通う前、通級担当者が子どもの観察に来てもらった時に、学級での様子や学習で困っていることを話したことはある。それ以外ではなかなか時間がなくて話し合っていない。
  - ・ 保護者や子どもから通級指導教室の様子は聞いているので、わざわざ担当者に連絡をして聞かなくてもよいかと思った。
  - ・ 子どもが普段学級では書かない漢字練習を、通級指導教室で指導を受け、それを大変うれしそうに見せてくれる。
  - ・ 懇談会で保護者から通級指導教室で学習したり、体のトレーニングをしたりしていることは聞いている。
  - ・ 直接担当者と話をしていないが、指導内容は子どもから話を聞いてなんとなく分かる。
  - ・ 通級指導教室へ行った翌日に、楽しそうに何をしてきたか子どもが教えてくれる。
- 

#### 6 A通級指導教室への要望等

---

- ・ 通級指導教室に子どもが楽しそうに通っているので、このまま続けてもらえたらと思う。
  - ・ 通級指導教室による指導内容をもっと知りたい。
  - ・ 通級指導教室での子どもの様子を知りたいし、集団での子どもの様子を知ってほしい。授業の様子を担当者に見に来てほしい。
  - ・ 通級指導教室に通う子どもより他の子どもが大変なので、通級担当者に観察に来てもらったリ、アドバイスが欲しい。
  - ・ 通級指導教室の様子を話し合う時間はなかなかとれないので、様子をたまに教えてほしい。
  - ・ 通級担当者とのやり取りをどうやって持てばいいのか分からない。こちらから連絡するのもにくい。
  - ・ 連絡ノートなどで子どもの様子を知りたい。
-

### 3 研究課題1の考察

インタビュー調査によって、2つの課題が明らかとなった。

1つ目は、通級指導教室と在籍学級の連携が十分には行われていないことである。津市内の通級担当者と在籍学級担任は、それぞれ通級指導教室と在籍学級の連携について、意識の違いはあるものの、双方ともに重要性は感じている。しかし現状において、平子・菊池(2012)など先行研究で指摘されているように情報共有の場を確保できていないことや、今西・玉村(2010)が指摘するように、他校通級は連携時間を確保することが難しく、そのため情報共有が十分に行なわれていなかった。

2つ目は、連携が十分に行われていないことで、在籍学級の担任が通級による指導についての理解が不十分であるため、通級指導教室での指導方法を在籍学級場で活用ができていないことである。在籍学級担任は、通級指導教室での指導の様子を参観する機会や情報共有する時間がなく、通級指導教室での指導内容を知る機会が少ないことが分かった。

これらのインタビュー調査の結果も踏まえ、通級指導教室と在籍学級の連携を通し在籍学級の支援体制モデルの検討を研究課題2で行った。

## V 研究課題2 通級指導教室を活用した支援体制モデルの検討

### 1 支援体制モデルの検討

通常の学級に在籍する、読み書きに困難さを抱える児童生徒を早期発見し、適切な支援や指導につなげていくために通級指導教室を活用した在籍学級の支援体制モデルの検討を行う。

本研究で扱う読み書きに困難さを抱える児童生徒に対し、早期発見し早期に適切な支援を行うことで困難さが軽減することを明らかにした研究(海津ら, 2008)をはじめ、小学1~2年生を対象に、通常学級における読み書きに困難さを抱える児童に対し、MIM-PM(多層指導モデル・読み書きのアセスメントと指導パッケージ)を用いて、通常の学級において、異なる学力層の子どものニーズに対応した指導・支援を学習につまづく前に行うことは、効果があったと多数の研究実践がある(各務, 2016、押田・川崎, 2013、堀部・樋口, 2019等)。さらに、アメリカにおいては、子どもの支援ニーズを把握し、速やかに、かつ、根拠に基づいた指導・支援が必要であるとされ、客観的に学習障害の可能性のある児童生徒を判断していく3層の診断モデル(RTI)が推奨され活用されている(羽山, 2012)。これらの先行研究をもとにして、次のような支援体制モデルを作成した(図1)。



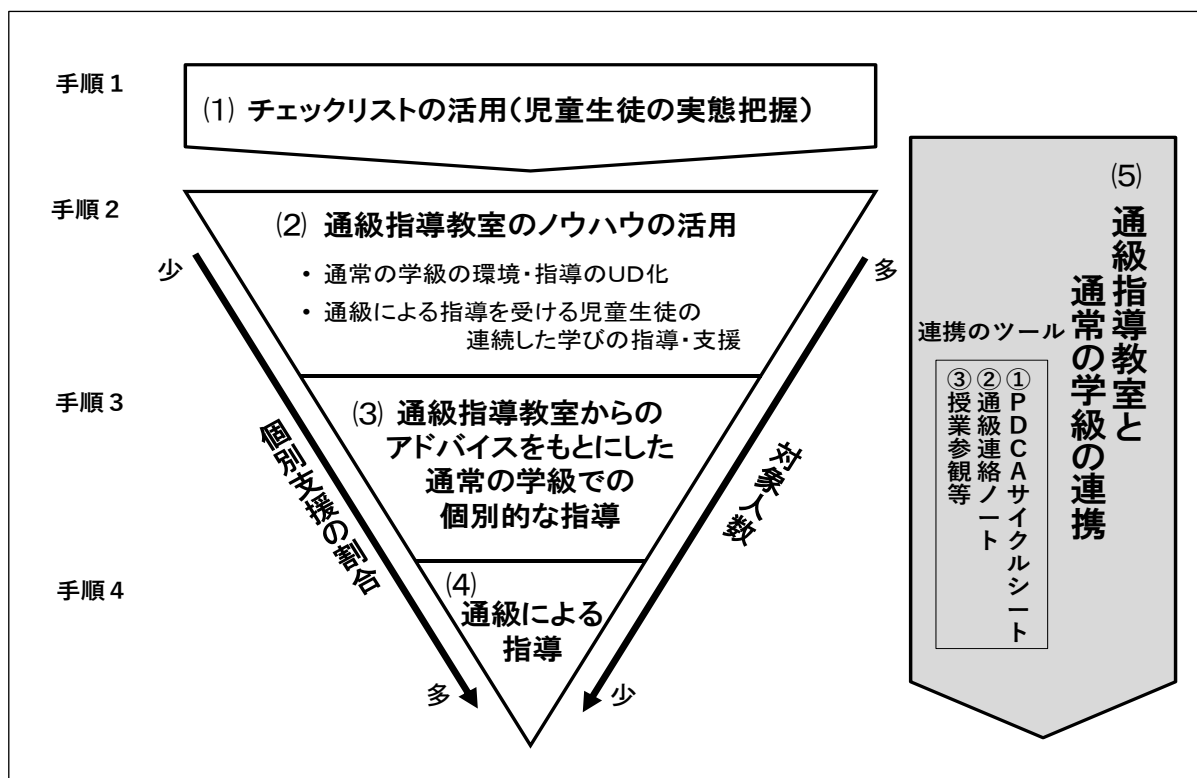


図1 通級指導教室を活用した在籍学級への支援体制モデル

(1) チェックリストの活用（児童生徒の実態把握）

本研究において、読み書きに困難さを抱える児童の実態把握には、読み書きのチェックリストを活用して在籍学級の担任が評価する。

この読み書きのチェックリストは、小学校全学年の通常の学級の児童を対象とし、学習上のつまずきのポイントを明らかにするためのチェックリストである。

(2) 通級指導教室のノウハウの活用

通級による指導の活用は、通級による指導を受ける児童生徒への指導のみだけではなく、通常の学級と通級指導教室の連携により、通常の学級に在籍する発達障がいの可能性のある児童生徒等への指導や支援に有効であると考えられる。川上（2012）と木下（2013）も、通級指導教室における発達障がいに関する専門的な指導や支援は、通常の学級でも活用することで、通級児生以外にも、効果の波及が期待できると述べている。このように、通級指導教室の活用が有効であると示されているものの、研究課題1で行った連携の実態調査においては、連携が不十分であることが明確となった。国立特別支援教育総合研究所（2018）は、通級指導教室と在籍学級の連携についての研究において、以下の内容が重要であると示している。

- ・ 学校全体、地域全体の取組を行うこと。
- ・ 本人の願い、思いを取り入れた自立活動の内容の選定すること。
- ・ 丁寧な実態把握を実施すること。
- ・ PDCA サイクルによる見直しをすること。

- (3) 通級指導教室からのアドバイスをもとにした通常の学級での個別的な指導  
 通級児生は、多くの時間を通常の学級で過ごす。そのため、通級指導教室の指導や支援方法を在籍学級においても活用することにより、通級児生の困難さが軽減されることが期待される。  
 また、通級担当者が持つ特別な指導や支援方法、児童生徒の困難さを見つけるポイントを共有し活用することで、在籍学級の全ての児童生徒の困り感を軽減し、生活の安定・学習への意欲の向上が期待できる。
- (4) 通級による指導  
 読み書きに困難さを抱える児童生徒の困難さの軽減を目指して、環境・指導方法の改善を第一に考えるが、環境・指導方法の改善では軽減に至らない場合もある。  
 その場合、校内委員会等で教職員間の情報共有を行い、保護者とも密に情報共有を行っていく必要がある。さらに、校内委員会を通して、保護者と本人の同意のもとに通級担当者によるさらに詳しいアセスメントを実施し、個別の指導や支援を行っていく必要があると考えられる。津市内の通級指導教室担当者は、「改訂版 標準読み書きスクリーニング検査－正確性と流暢性の評価－（以下、STRAW-R）」の研修を受けており、全ての通級指導教室において実施が可能な体制が整備されているので、専門的な支援も受けやすい。
- (5) 通級指導教室と通常の学級の連携  
 連携モデルを考え、次の3点を連携のツール（①PDCA サイクルシート②通級連絡ノート③授業参観等）として考えた。効果的な連携のイメージは、図2のとおりである。

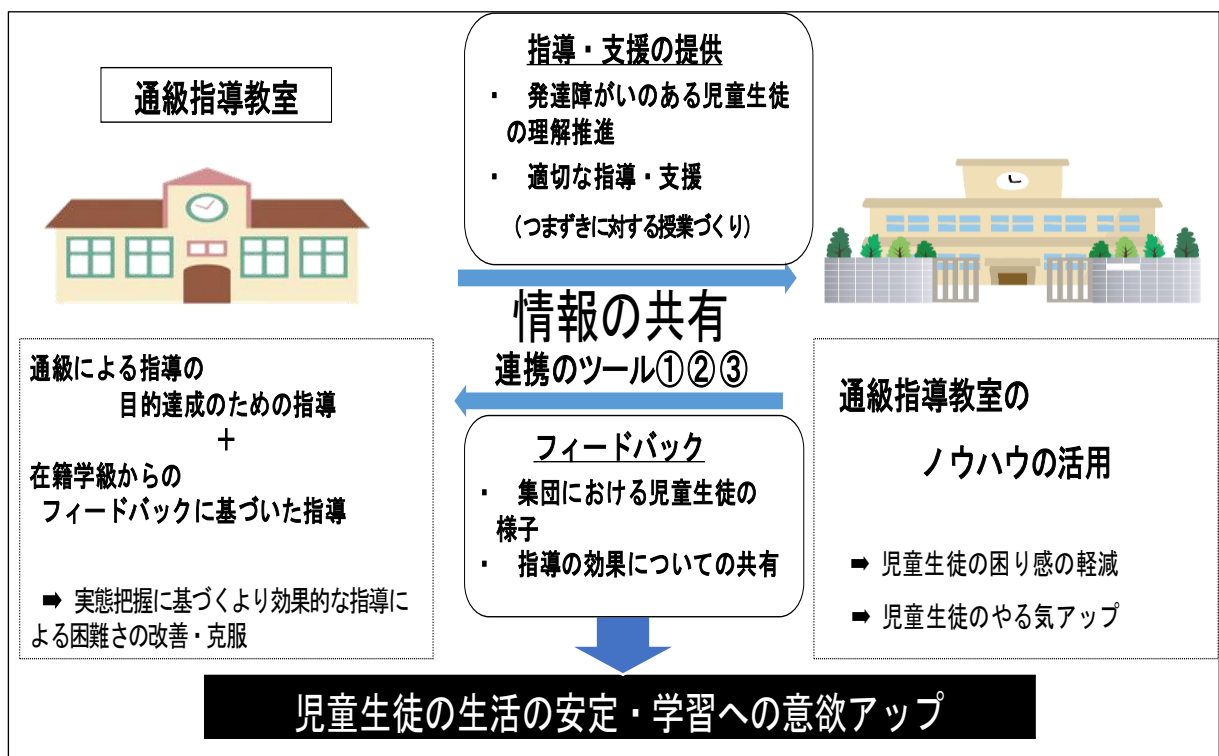


図 2 通級指導教室と在籍学級の効果的な連携イメージ

### ① PDCA サイクルシートの作成

通級児生に対して、通級担当者と在籍学級担任が共通の目標をもち指導や支援の連続性を確保するために PDCA サイクルシートを作成した。これは、通級指導教室と在籍学級が共通した目標を持ち、通級児生、保護者の願いを取り入れることにより、指導内容の選定の適確化を図り、児童生徒の生活の安定と学習への意欲の向上へとつないでいくことができると考えた。

### ② 通級連絡ノートの作成

通級指導教室での指導や支援の内容を、通級担当者、保護者、在籍学級担任との3者で情報共有ができるよう通級連絡ノートの作成を試みた。研究課題1で得られた結果から、以下の3点をポイントとして作成した。

- ・ できるだけ手間がかからないものであること
- ・ 通級指導教室での指導の内容が保護者と在籍学級担任と共有できること
- ・ 通級指導教室で受けた指導の記録が残ること

### ③ 授業参観等

双方の授業の参観等により、通級担当者は通級児生の在籍学級での授業や休み時間等の様子が分かり、通級による指導の効果と今後の指導方針について確認することができる。さらに、読み書きのチェックリストにより在籍学級における通級児生以外の読み書きに困難さを抱える児童生徒を把握し、在籍学級担任へ指導や支援の助言ができる。また、在籍学級担任は、通級指導教室の少人数（個別の学習）の授業等を参観することにより、通級児生の普段では見えない頑張りや困難さなどを把握することができる。

連携の時間を確保するためには、校内での時間割の変更などの協力を得て実行することにした。

## 2 支援体制モデルの実践

### (1) チェックリストの活用（児童生徒の実態把握）

A通級指導教室に通う児童生徒の在籍学級、6学級（n=151）において読み書きのチェックリストによる児童の実態把握を行った。読み書きのチェックリストを在籍学級担任に配付し、在籍学級担任が日々の様子をもとにチェックリストへの記入を行った。その後、集計を行い、困難さがみられるとされる9点以上（15点満点）の児童については、通級担当者が在籍学級担任に、結果に基づく指導や支援方法について助言を行った。

### (2) 通級指導教室のノウハウの活用

個々の教育的ニーズに沿った指導内容は以下のとおりである。

#### ① 読みの困難さへの指導助言

ア 文字を単語で読めるようにする指導や支援

- ・ 単語を意識できるように本文の中で単語に丸を付ける。
- ・ 単語を意識した指示の出し方などを工夫する。

イ 読むときに集中できる指導や支援

- ・ 文章を読むときに、行飛ばしをしないために、定規で読む文の次の行を隠す

ようにする。

- ・ 漢字にルビをふる。

ウ 音読に時間がかかることへの指導や支援

- ・ フラッシュカードなどを使い、示された単語をすぐに読めるように練習をする。
- ・ カタカナの 50 音や特殊音節を読む練習をする。

② 書きの困難さへの指導助言

ア 読みにくい字を書くことへの指導や支援

- ・ 縦書きや横書きのラインノートでなく、方眼ノートを使用し、一文字の書くバランスをわかりやすいようにする。
- ・ 運筆練習の教材を使って、字を書く指の動きがスムーズになるように練習をする。

イ 書き間違えることへの指導や支援

- ・ 大きな字で正しく書く練習をする。
- ・ 書く量についてその子ができる量を見極めて調整する。

ウ 書くことを嫌がることへの指導や支援

- ・ 繰り返し書く練習を減らし、一文字を丁寧に書くなどして量の調整をする。
- ・ 一マス大きさを調整する。

(3) 通級指導教室からのアドバイスをもとにした通常の学級での個別的な指導

通級担当者が在籍学級担任に対して、在籍学級の学習環境を整えること、指導や指示を視覚化することなどの助言を行った。また、授業においては、授業の初めと終わりが分かるなどの授業の見通しを子どもが持てるように助言を行った。

#### 【実践例】

- ・ 読みに困難さを抱える通級児生の指導について、通級指導教室で国語の教科書の読む練習を行った。その際、読む区切りが視覚的に分かるように、文節に印をつけて読む練習を行った。在籍学級でそれを使用し、普段よりすらすら読み、担任からも褒められた。担任はその方法を、同じように読みに困難さを抱える児童に行った。
- ・ 在籍学級担任が通級担当者から、指示伝達を口頭指示だけでなくボードや板書などを使い視覚的に伝える助言を受け実行した。通級児生もクラス全体も以前より指示を理解し行動できるようになってきた。そのためクラス全体が落ち着いてきて、授業の進行具合が良くなった。
- ・ 在籍学級の担任が通級担当者と読み書きのチェックリストによる結果を情報共有することにより、在籍学級における通級児生以外の読み書きに困難さを抱える児童生徒への具体的な対応が分かり、よりいっそう一人一人の教育的ニーズに沿った指導ができるようになった。

次に、在籍学級担任が通級指導教室の指導や支援を活用した感想を 7 に示す。

## 7 在籍学級担任が通級指導教室の指導や支援を活用した感想

---

- 言葉の理解が難しい児童に対して、指示や用語説明において、言葉を統一したことで、子どもの学習の理解度が増し、以前に比べ学習意欲が高まってきた。
  - 口頭だけの指示では理解が難しく、聞き漏らしのある児童に対して、指示の視覚化（板書など）を在籍学級で行った。その結果、通級に通う児童のみでなく、学級に在籍する全ての児童が、指示通りに素早く動ける場面が出てきて、ほめる場面が増えた。
  - 集中が継続しにくい児童がおり、クラス全体が落ち着かなかった。通級指導教室で使用しているトレーニングを朝の時間に学級で取り組み始めたところ、クラスが落ち着いて学習できるようになってきた。
  - 以前より子どもをほめることが増え、子どもとの関係がよくなった気がする。
  - 自分が指示する言葉を、短く伝えるように意識することで、子どもが指示をよく聞くようになった。
- 

### (4) 通級による指導

本研究において、通級担当者によるさらに詳細なアセスメントを個人に実施し、そのアセスメントの結果に基づく指導を行うことの効果については、検証ができなかった。しかし、今後、個別支援の評価についても検討する必要性がある。

### (5) 通級指導教室と通常の学級の連携

#### ① PDCA サイクルシートの使用

通級担当者と在籍学級担任が児童の指導目標や指導評価、課題の設定等について話し合う場を持ち、PDCA サイクルシートへの記入を行った（図3）。まず、1学期間の長期目標を設定し、次に長期目標を達成するための具体的な短期目標を設定した。このことにより指導や支援の方向性を明確にし、通級児生の指導の連続性を確立することができた。

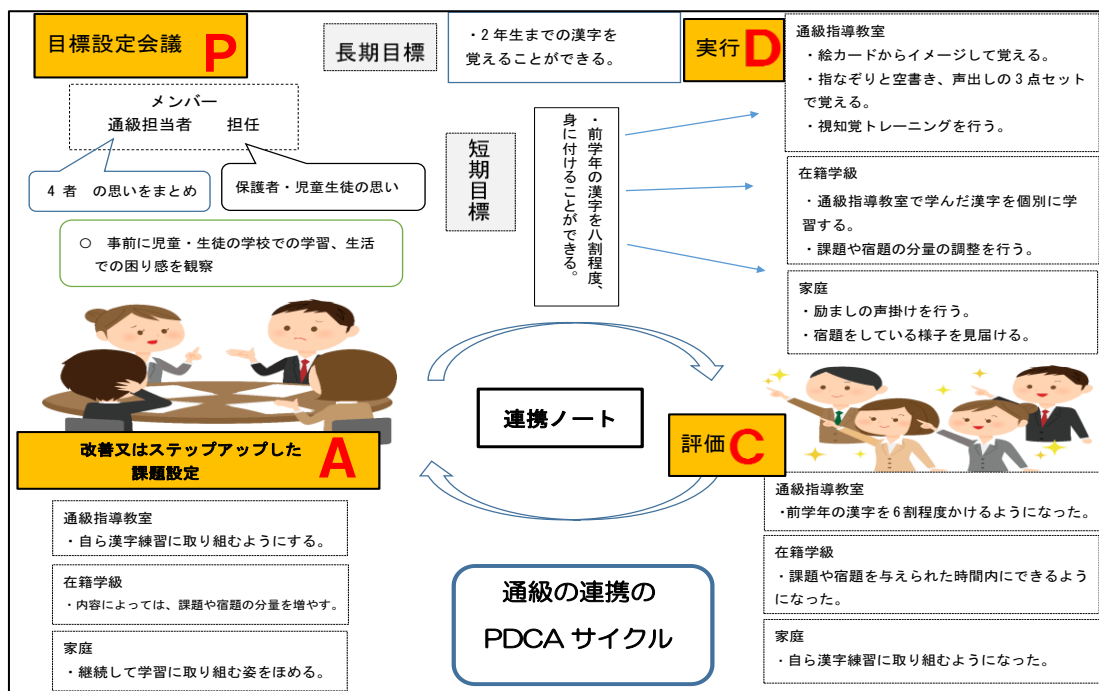


図3 PDCAサイクルシートの活用例

次に、PDCAサイクルシートに関する在籍学級担任の感想を8に示す。

## 8 在籍学級担任のPDCAサイクルシートを使用した感想

- ・ 個別の指導計画により具体的な目標を立てたので、指導がしやすくなった。
- ・ 共通目標に向かっての指導内容を具体的に決めたので、話し合い直後から実践できた。
- ・ 学校生活のどの場面においてもPDCAサイクルシートの指導目標を意識して子どもを指導でき、子どもをほめる場面が増えた。
- ・ 目標を意識することができたが、その後時間がなく、話し合う機会を担当者と持つことができなかった。

### ② 通級連絡ノートの使用

使用については、次の流れで行った。

- ア 通級児生が通級指導教室で学習後、通級担当者がその日の指導の目的、指導内容を通級連絡ノートに記入する。
- イ 通級連絡ノートを家庭へ持ち帰り、保護者にコメントを記入してもらう。
- ウ 通級児生が在籍学級担任に渡す。
- エ 在籍学級担任は内容を確認し、サインをして児童に渡す。
- オ 通級児生が次の通級指導教室へ通う際に、通級担当者へ連絡ノートを渡す。

次に、通級連絡ノートの使用について、在籍学級担任の感想を 9 に示す。

### 9 通級連絡ノートを使用した在籍学級担任の感想

---

- ・ 今まで知らなかった通級指導教室による指導内容が分かった。
  - ・ 子どもがノートを必ず担任へ渡しに来るので、そのことをほめてあげることができた。
  - ・ このノートを活用し始めてから、通級児に対して声をかける機会が増えた。
  - ・ 通級担当者に話がしやすくなったので、子どもの相談がしやすくなった。
  - ・ 在籍学級の学習の進路を伝えることができ、学習の進路を合わすことができた。
  - ・ 通級担当者からの報告を受け、保護者の気持ちも以前より知るこができた。
  - ・ 以前わからなかった子どもの困り感がわかるようになって、子どもへの接し方が変わった。
- 

#### ③ 授業参観等

通級担当者と在籍学級担任が、自校で時間割調整を行い双方の授業等の参観を行った。在籍学級担任が通級指導教室を参観するにあたっては、事前に通級指導教室での指導内容の目的を、個別の指導計画で確認することで、通級指導教室による指導内容をより詳細に観察することができた。また、参観の時期は通級児生が通級指導教室で過ごす時間に慣れてきた頃、双方の時間調整を行い実行することにした。また、通級担当者が、在籍学級での通級児生の様子を確認する際には、通級児生の在籍学級での困り感が出やすい教科を中心に参観した。

次に、在籍学級担任から得られた感想を 10 に示す。

### 10 在籍学級担任の通級による指導を見学した感想

---

- ・ 子どもが学級で見せている姿と違った。表情が穏やかで、やる気に満ちていた。指導中に、子どもに対して認める言葉がけを心がけている担当者の指導を自分も真似したい。
  - ・ 通級指導教室で行っているコグトレプリントをクラスの全員でもできそうである。授業に導入し、集中できる力をつけていきたい。
  - ・ クラスでは見られないような、集中して取り組む姿がみえた。
  - ・ 参観したら子どもがうれしそうだった。また、参観したい。
  - ・ 通級指導教室で、子どもがあんなに褒められたら、「また、行きたい」って思うだろうと思う。ほめられた子どもがやる気に満ちていた。自分も、ほめる指導内容にしていきたいと思った。
- 

## 3 研究課題 2 の考察

研究課題 2 では、通級指導教室の専門性を活用した在籍学級への支援体制モデルの検討を行った。

児童生徒の実態把握には、読み書きのチェックリストを活用することにより、教員間

で児童生徒の見方に差が生じず、児童生徒の問題行動が発達障がいによるものかを、共通の理解のもとで判断することができた。また、このチェックリストは教員が実施する間接的なアセスメントであるため、児童生徒への負担はなかった。さらに、読み書きのチェックリストを実施することで、在籍学級担任が児童生徒の行動を観察する視点を知ることができ、児童生徒の特性を的確に把握できるようになった。このことから、チェックリストの活用は、在籍学級担任に特別支援教育に関する専門的視点を与える大事なツールの一つとなることが考えられる。

通級指導教室と在籍学級の連携モデルの提案では、PDCA サイクルシートの活用は、通級担当者と在籍学級担任の双方で指導目標を確認しながら設定することができ、児童生徒の学習状況に応じた具体的な指導や支援方法へつなげることができた。

通級連絡ノートの活用は、在籍学級担任が通級による指導内容を知ることができた。通級担当者と在籍学級担任の双方での指導内容の確認ができ、指導や支援方法の連続性が図られ、一層指導効果が向上した。

連携モデルとして作成した PDCA サイクルシート、通級連絡ノートは、通級担当者、在籍学級担任、保護者の3者間で活用するように作成したため、保護者の思いをはじめそれぞれの考えを指導に反映することができた。また、通級担当者と在籍学級担任の双方の授業参観も提案したことで、在籍学級担任は通級児生をはじめ他の子どもの指導についても通級担当者とは気軽に相談ができるようになり、相談の中で得たアドバイスを在籍学級担任が実践することで、学級全体が落ち着いてきた。さらに、在籍学級担任が通級指導教室での指導を実際に参観することで、読み書きに困難さを抱える児童生徒の教育的ニーズにも対応した指導や支援方法を理解し、在籍学級で実践することができるようになった。しかし、参観を行うための時間調整が、難しいところもあり、双方が授業参観を行える学校体制づくりが必要であると考えられる。

通級担当者による、専門的な指導や支援方法を在籍学級担任が活用した後、読み書きのチェックシートによる調査を再度実施したが、その結果、つまずきに対する評価点の合計点数が次の表のように向上し、効果が見えた。

支援前後の読み書きに困難さを抱える児童生徒の評価点の合計点数比較 (n=26)

評価項目	支援前	支援後	変化値
読み	224	183	▲41
書き	284	194	▲90

「読み」については、13人、「書き」においては18人が支援前よりつまずきに対する評価点が低くなり改善がみられた。「読み」においては、国語の音読での読み間違いに対して、指さしや定規などの補助具を使う指導により、読み間違いが少なくなるという効果が見られた。「書き」においては、縦書きや横書きのラインノートではなく、方眼ノートの使用や、大きな字で丁寧に正しく書く練習に取り組むことにより、書くことへの抵抗感が薄れてきた。

このように在籍学級担任が読み書きのチェックリストを用いて、児童生徒の特別な



教育的ニーズを把握し、通級指導教室のノウハウを活用することで、指導の効果が表れたと考えられる。

## VI 成果と課題

本研究の目的は、児童生徒に対して、チェックリストを用いて、教員が通常の学級に在籍する児童生徒の困り感を十分把握し、適切な指導ができる支援体制の在り方について検討を行うことであった。

研究課題1で、通級指導教室と在籍学級の連携の実態について調査を行い、連携が十分に行われていない現状を把握した。これを踏まえ研究課題2では、3つの連携ツールを活用した支援のモデルを提案し、読み書きに困難さを抱える児童生徒に対する支援体制の検討を行った。

読み書きにチェックリストを活用し、在籍学級における読み書きに困難さを抱える児童生徒の実態を把握することができた。これは、在籍学級担任が、これまで感覚的にとらえていた児童生徒の困り感を、チェックリストという定量的な視点を用いることで、より詳細かつ正確に実態把握ができるようになったと言える。在籍学級担任からは「チェックリストを活用することで『書き』の苦手さを感じてはいたけれど、『書き』の指導における留意すべき事項をチェックリストから認識することができ、指導方法を改善することができた。」との報告があった。

早期支援については、通級担当者の専門性を活用して個々の教育的ニーズに応じた適切な指導や支援を行えるよう、連携モデルとして、PDCA サイクルシートと通級連絡ノートを活用、そして、双方の授業参観を提案し、通級指導教室と在籍学級との連携を通して、読み書きに困難さを抱えた児童生徒への指導方法の改善を図った。その結果、通級担当者とは在籍学級担任が指導目標を共有し、双方での連続性が生まれ、指導目標に達成できた事例も生まれた。

しかし本研究では、通級担当者による詳細なアセスメントを個人に実施し、そのアセスメントの結果に基づく指導を行うことの効果については、本人や保護者の同意を得る等の時間が確保できず検証することができなかつた為、今後、検討する必要がある。

また、通級児生が在籍していない通常学級の担任が通級担当者とのように関わり、発達障がいに対して専門性をもった通級指導教室をどう活用していくのかという検討までには到っておらず、今後の研究課題として挙げられる。

そして、読み書きに困難さを抱える児童生徒のために、学校が担任の指導力の向上、指導方法の改善に加えてどのような合理的配慮が提供できるかも今後の課題である。例えば全国的には、授業や試験でのICT機器の活用や、筆記に代えて口頭試問による学習評価を行ったりするなど新たな試みの実践例が報告されている。

本研究の参考のために東京都渋谷区への研究視察を行った際に、通級児生が在籍している学級の授業を参観し、その際に通級担当者とは話をする機会を得た。「書き」に困難さを抱える児童の中には、「字がうまく書けない」「時間内に書くことができない」等の理由から、学習意欲をなくし学習理解まで到らなかつた児童が、ICT機器を活用することで学習意欲の低下や理解不足が徐々に解消されてきたという事例を聞いた。

津市内でも、通級指導教室において「書き」への困難さを抱える児童に対して、ICT機

器を活用し学習を行っている事例があり、ICT 機器を活用することにより、通級児生の学習意欲や理解が高まり、学習効果があがったという報告がある。今後、読み書きに困難さを抱える児童生徒の指導と支援の方法の一つとして、ICT 機器の活用方法や効果を研究し、さらに、広げていく必要があると考える。

## Ⅶ おわりに

特別支援教育の充実に向けて、専門的な技術と指導体制を導入するための方策として、通常の学級と通級指導教室の連携による支援体制モデルを提案した。このモデルが実施されれば、通常の学級においても、安心できる学級づくりと確かな学力定着等が十分期待できるものと考ええる。

さらに、発達障がい等による、特別な配慮を必要とする児童生徒への対応については早ければ早いほど効果があると言われているため、学校においても、早急に早期発見と早期支援システムを構築する必要がある。全ての子どもがよりよい環境で、一人一人の教育的ニーズに応じた教育を受けるためにも、各学校において、校内委員会の運営や内容を充実させ、必要に応じて専門的な支援が受けられるシステムを構築していくことが必要であると考ええる。

## Ⅷ 引用・参考文献

- 石谷禎孝・平谷美智夫・榊智史・巨田元札・川谷正男・小坂拓也・滝口慎一郎・藤澤隆史・松浦直己『読字障害の疫学研究：幼児期から成人までの縦断的研究3 ～中学生時代における学習成績とメンタルヘルスの問題～』第122回日本小児精神神経学会ポスター発表（2019）
- 今西満子・玉村公二彦『奈良市におけるLD通級指導教室の現状と指導の展開』奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 19, 167-172（2010）
- 押田正子・川崎聡大『通常小学校において理解と活用が望まれる発達性読み書き障害児への支援の在り方：発達性dyslexia児に対する大学教育相談を通じて』教育実践研究:富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要（7）, 27-32（2013）
- 海津亜希子『LD児の学力におけるつまずきの特徴 一健常児群との学年群ごとに比較して一』国立特殊教育総合研究所研究紀要, 29, 11-32（2002）
- 海津亜希子・平木こゆみ・田沼実敏・伊藤由美・Vaughn.S『通常の学級における多層指導モデル(MIM)の効果 ～小学1年生に対する特殊音節表記の読み書きの指導を通じてから』教育心理学研究, 56, 534-547（2008）
- 各務哲人『小学校通常学級における読みにつまずく可能性のある児童の早期発見と具体的支援』教育実践高度化専攻成果報告書抄録集, 6, 115-120（2016）
- 川上賢祐『通級指導教室からの在籍校支援』日本LD学会第21回大会発表論文集, 247（2012）
- 木下裕紀子『読み書き困難の児童が在籍する学級での授業づくり』日本LD学会第22回大会発表論文集, 263（2013）

- 国立特別支援教育総合研究所『特別支援教育における教育課程に関する総合的研究－通常の学級と通級による指導の学びの連続性に焦点を当てて－』国立特別支援教育総合研究所研究成果報告書 (2018)
- 総務省『発達障害者支援に関する行政評価・監視結果に基づく勧告』(2017)
- 羽山裕子『アメリカ合衆国における学習障害児教育の検討－RTIの意義と課題－』教育方法学研究, 37, 59-69 (2012)
- 平子雅張・菊池紀彦『発達障害児に対する通級指導教室の役割とその重要性についての検討』三重大学教育学部研究紀要 第63巻, 203-214 (2012)
- 平谷美智夫・服部恵・山名寿美子・榊智史・堀内萌・熊下由加・高塚真緒・仲嶺実甫子・松浦直己『ディスレクシアの疫学研究：幼児期から成人までの縦断的研究「ディスレクシア生徒の中学生時代の問題」～学習成績とメンタルヘルスの関連～』公益財団法人明治安田こころの健康財団 研究助成論文集 通巻第54号 (2018)
- 藤川雅人・石井尚美・落合正彦・佐藤貴宣・柳沼泰子・藤井和子『通級指導教室担当教師と通常の学級担任との連携～連携の実態と情報交換の方法との関連性を中心に～』特殊教育学研究, 53(3), 165-174 (2015)
- 堀部要子・樋口和彦『「書き」の効果に着目した多層の読み書き指導モデルの検討』LD研究, 28(1), 96-110 (2019)
- 文部科学省『学習障害児に対する指導について(報告)』(1999)
- 文部科学省『特別支援教育の推進について(通知)』(2007)
- 文部科学省『生徒指導提要』171-175 (2010)
- 文部科学省『共生社会の形成にむけたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)』(2012a)
- 文部科学省「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」(2012b)
- 文部科学省『発達障害を含む障害にある幼児児童生徒に対する教育支援体制整備ガイドライン～発達障害などの可能性段階から、教育的ニーズに気づき、支え、つなぐために～』(2017)

## Ⅸ 資料

### 資料 1 読み書きのつまずきに関するチェックリスト

#### 別紙 1 読み書きのつまずきに関するチェックリスト

集計表No.	学校名 (                      )                      (   ) 年 (   ) 組 (   ) 番
--------	---

各チェック項目に対して、0～3のいずれかに○をつけて評価してください。

※評価の目安

「全く当てはまらない」→0 「現在より2学年以上の遅れがある」→3

領域	項目番号	チェック項目	評価			
			ない 0	まれにある 1	ときどきある 2	よくある 3
読む・ 文章を読むことが 苦手	①	初めて出てきた語や、普段あまり使わない語などを読み間違える	0	1	2	3
	②	文中の語句や行を抜かしたり、または繰り返し読みだりする	0	1	2	3
	③	音読が遅い	0	1	2	3
	④	勝手読みがある (「行きました」を「いました」と読む)	0	1	2	3
	⑤	文章の要点を正しく読みとることが難しい	0	1	2	3
書く・ 文字を書くことが 苦手	⑥	読みにくい字を書く (字の形や大きさが整っていない。まっすぐに書けない)	0	1	2	3
	⑦	独特の筆順で書く	0	1	2	3
	⑧	漢字の細かい部分を書き間違える	0	1	2	3
	⑨	句読点が抜けたり、正しく打つことができない	0	1	2	3
	⑩	限られた量の作文や、決まったパターンの文章しか書かない	0	1	2	3

備考
----

合計	点
----	---

<b>連携型個別指導計画</b>													
学校	年 組 氏名：												
在籍担任：	通級指導担当：												
令和 年 月 日作成	(作成者： )												
<p>■ 指導目標（長期目標）</p> <p>在籍学級での目標</p> <p>(1)</p> <p>(2)</p> <p>(3)</p> <p>通級指導教室での目標</p> <p>(1)</p> <p>(2)</p> <p>(3)</p>													
<p>■ 短期目標と手立て、及び評価</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 30%;"></td> <td style="width: 30%;"></td> <td style="width: 40%; text-align: center;">通級指導教室</td> </tr> <tr> <td>短期目標</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>手立て</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>評価</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>				通級指導教室	短期目標			手立て			評価		
		通級指導教室											
短期目標													
手立て													
評価													

<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">月 日 ( )</td> <td style="width: 50%;">時間目</td> <td style="text-align: right;">在籍学級担任サイン</td> </tr> <tr> <td colspan="3" style="text-align: center;">指導の記録</td> </tr> <tr> <td colspan="3" style="height: 100px;"></td> </tr> <tr> <td colspan="3" style="text-align: center;">家庭より</td> </tr> <tr> <td colspan="3" style="height: 100px;"></td> </tr> <tr> <td colspan="3" style="text-align: center;">その他連絡等</td> </tr> </table>	月 日 ( )	時間目	在籍学級担任サイン	指導の記録						家庭より						その他連絡等			<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">月 日 ( )</td> <td style="width: 50%;">時間目</td> <td style="text-align: right;">在籍学級担任サイン</td> </tr> <tr> <td colspan="3" style="text-align: center;">指導の記録</td> </tr> <tr> <td colspan="3" style="height: 100px;"></td> </tr> <tr> <td colspan="3" style="text-align: center;">家庭より</td> </tr> <tr> <td colspan="3" style="height: 100px;"></td> </tr> <tr> <td colspan="3" style="text-align: center;">その他連絡等</td> </tr> </table>	月 日 ( )	時間目	在籍学級担任サイン	指導の記録						家庭より						その他連絡等		
月 日 ( )	時間目	在籍学級担任サイン																																			
指導の記録																																					
家庭より																																					
その他連絡等																																					
月 日 ( )	時間目	在籍学級担任サイン																																			
指導の記録																																					
家庭より																																					
その他連絡等																																					